
ネコな一日

エンデバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネコな一日

【著者名】

エンデバー

N3679C

【あらすじ】

いつの間にか幽霊になってしまった俺。幽体離脱してしまったそんな俺が、一匹のネコになり、一日を送る、ネコのストーリー。

いつものように満員電車に揺られ俺は大学に向かう。通勤ラッシュの時間帯にあたるため、いつも満員なのだ。一本遅い電車だと、一時限目の講義には間に合わない。かといって、一本早い電車だと、講義までの時間が余ってしまって暇で仕様が無い。小さな箱にぎゅうぎゅうに詰め込まれた中は、通勤中のサラリーマンだの、通学中の学生だの様々だ。そんな中に俺はいる。

今日も、いつもと変わらない、普段の何もないサイクルが続くのだろうと思っていた。満員電車に揺られ大学に向かう。大学での講義を受け、それが終われば電車で家に帰るといつ、至って平凡な日であると。

満員電車に揺られること一十分。電車は大同川という川の鉄橋にさしかかっていた。目的の駅まで、まだ四十分ある。

俺は揺れる電車の中でつり革をつかみながら、ゆったりと流れる川に目を向けていた。

突然身体が電車の進行方向に向かって強い衝撃を受けた。どん、と強く背中を押されたようで、踏ん張つて止めることはできなかつた。電車が急ブレーキをかけたようだ。

次の瞬間、俺の身体はふわりと軽くなつた。身体から魂が抜けるかのような感覚。それも一瞬だった。気づけば、身体のあちこちから激しい痛みを感じていた。頭からは血が流れ出しているようで、額から頬にかけて流れ落ちてくる。身体は言うことを見かない。全身が麻痺しているような感覚だ。

どれくらい痛みに耐えていたのだろうか、俺は意識が遠のいていく感じを覚えた。ここで意識を失つてしまつてはいけない。瞬間的にそう思つたが、身体は意思に反していた。視界が徐々に歪んで見えてくる。瞼は意思に反し閉じようとする。そして俺の意識は、スイッチを切つたようにふと途切れた。

気がついたとき、その場所がどこなのか一瞬わからなかつた。少ししてから病院だということに気づいた。しかし、俺はあまりにも不思議な光景を目の当たりにしていた。これは夢だ、と自分に言い聞かせるように頭を振つた。

ベッドで寝ているのは紛れもなく俺だつた。周りを、大学の友達や家族の者や医師たちが取り囲んでいる。母は俺の手をつかみながらわんわん泣いていた。父はそつと母の肩に手を置いている。姉は今にも泣き出しそうな顔で俺を見下ろしていた。そんな彼らの後ろに俺は立つていた。

どうして俺が一人もいるんだ？ 様々なことが頭の中を巡る中、真つ先に出てきた疑問がこれだつた。全く理解に苦しむ状況だ。

「おい、俺はここにいるぞ」

彼らの背中に向かつて声をかけたが誰も反応しなかつた。聞こえないふりでもしているのだろうかと思い、もう一度声をかけてみる。

「俺はここだ！ 誰か聞けよ」

先程より大きな声でいった。同じように誰も反応しなかつた。身体が異常に軽いように思えた。ふと思いつて、その場でジャンプをしてみた。不思議なことに身体はふわりと宙に浮いた。

「うわあ！ なんだこれ」

思わず声を漏らした。それでも周りの者には聞こえていなによつた。

俺はふわふわと宙を漂い、天井近くまで舞い上がつた。徐々に身体をコントロールできるようになつてくると、寝ている自分の頭上までやつてきた。ここにきてやつと事情が飲み込めつつあつた。

どうやら俺は、何らかの理由で幽体離脱をしてしまつたらしい。

ベッドで寝ている俺から魂が抜けてしまつたということになる。おそらく、あの時電車で起きたことが原因なのではないだろうか。お体、あの電車で何が起つたのだろうか。

幽体離脱ということは、俺は死んではいないのだろう。今の俺は心肺停止状態か、遷延性意識障害、いわゆる、植物状態に陥つてい

ることだらう。いや、死んではないのだから心肺停止状態ではないはずだ。

俺は寝て いる自分に勢いよく突っ込んで行つた。そうすれば戻れると思った。

しかし俺の身体は幽体の俺を拒んだ。身体に入ろうとした瞬間、何かに弾かれるような強い衝撃を受けた。もう一度同じように試みたが、結果は同じだった。

もう生き返れないのか、と思うと俺はがっかりと肩を落とした。泣きたいけど、涙さえ出でこない。

「亮輔、目を覚ませよ」

姉が沈んだ声で いた。いつの間にか姉は泣いていた。

俺は姉の後ろに立つと、肩に手を乗せようとした。しかし、俺の手はするりと姉の身体をすり抜けた。幽体の俺にはなにもすることができない。

なにもできない俺は居心地が悪くなり、窓から病室を飛び出した。身体はふわふわと空を漂っている。大空に解き放たれた風船のように、いくあてもなく、ただ空をさ迷う空しい存在。今の俺にぴったりの表現ではないか。

どうせ生き返ることは無理なのだから、幽体で存分に楽しんでやろうと俺は開き直つた。

身体を自在に操り、空をビュンビュンと駆け回つた。雲を突き抜け、空高くから街を見下ろしてみる。

人が小さなアリのように見えた。アリたちはせかせかと街を歩き回つて いる。右往左往するアリたちはまるで働きアリそのものだ。都会のビル群は玩具の積み木のようである。

突然後ろのほうから轟音が聞こえてきた。俺は振り返つてみる。

巨大な鳥が、轟音と共に物凄いスピードで俺に向かつてくる。俺は避けることなく、ただぼうっとそれを見ていた。巨大な鳥は俺をすり抜けていくと、何事もなかつたかのよう に去つて行つた。

街へ降りようと雲を抜けた瞬間、路地裏をすたすたと歩いている

一匹の黒ネコを捉えた。ネコなどの動物には入れるのだろうか？少し考え込んでから、黒ネコに向かって猛スピードで突っ込んで行った。身体はすっと、ネコの身体にとけ込むように入つていった。ネコの身体を乗つ取ることに成功した。意識は完全に俺のものだ。ただ身体がネコなだけ。入ることができたのだから、いつだつて出ることもできるだろう。

ネコの姿を借り、俺は歩き出した。慣れない歩き方に、俺の足取りは覚束無い。酔っ払いのおっさんみたいに、時折ふらついたりする。それでも、徐々に慣れてくると、走ることもできるようになつた。ネコの身体は軽で足も人間より断然速かつた。

俺はふらふらと街をさ迷つていた。行くあてなどなにもない。「安いよ、やすいよー。新鮮な魚をお昼のおかずに、夜のおつまみにどうですか」

「どこからか威勢のいい声が聞こえてきた。俺は知らず知らずのうちに、声のするほうへと歩みだしていった。

「美味しい新鮮な魚はどうですか」

帽子を被つた、魚屋の店主らしき人物が、威勢のいい声を飛ばしていた。俺は魚屋に近づいていった。

「しつしつ。またお前か、こっちに来るな」

俺に気づいた店のオヤジは近くの簞を手にすると、俺を追い払うようにそれを振り回した。俺は少し距離をとつた。どうやらオヤジの言い草からして、このネコは店の品を奪う常習犯らしい。

「お前なんかをお呼びじゃないんだよ。ひとつと失せやがれ、この泥棒ネコが」

オヤジは俺を睨みつけながらいった。オヤジの言葉に腹が立つた。昼も近く腹が減つっていた。この魚屋から、一匹魚を盗んでやろうと決めた。盗んだからといつても、ネコなのだから犯罪じゃない。

（目に物見せてやる）

オヤジは警戒の色を浮かべ、依然として俺を睨みつけている。相当用心深いやつだ。くるりと魚屋に背を向け、俺はゆっくりと歩き

出した。

「奥さんどうです。今日の食卓にこの新鮮な魚を並べてみてはいかがですか」

オヤジは再び営業に戻ったようだ。ちらりとオヤジのほうを見やる。満面の笑みを浮かべながら、箸と向き合っていた。当然のことながら、手に箸は持っていない。

心の中で笑いながら、俺は魚屋のほうに向かつて駆け出した。

「あつ！ この泥棒ネコが」

オヤジは叫んだ。商品の秋刀魚を一つくわえ、少し走ったところで振り返った。オヤジは箸を持ち、怒りで顔を赤くしていた。

「あんのやろー。許さねえ。とつつかまえてやる」

オヤジは俺に向かつて走り出してきた。ネコと人間、その足の差は歴然だ。本気で走つてもいないので、オヤジとの距離はみるみる離れていった。五十メートル程走つたところで、オヤジは諦めた。生で食べる秋刀魚は不味くはなかつた。むしろ、美味しかつた。生魚が嫌いな俺でも、ぱくぱくと食べられた。ネコの味覚が影響しているからだろうか。ともあれ、秋刀魚を平らげた俺は、それだけで満腹になつた。散々走り回つたせいか少し喉が渇いていた。

ネコの俺はお金など一銭も持つていない。さてどうしたものか。どうやつて飲み物を手に入れようか、思考を巡らせた。先ほどの魚屋のようだ、スーパーなどに入り込み、商品を奪うということは無理だろう。無難に考え、やはり、お金を手に入れるとこうことが、先決のようだ。

思い立つた答えが自動販売機だ。少し歩いたところで、自動販売機を見つけた。自動販売機の下に顔を突っ込んで見る。少しきつい。自動販売機の下には、たまにお金が落ちているものだ。誤つて落としてしまい、お金がその下に転がつてしまつてことことがある。そうなると、手が届かなければ諦めるしかない。

奥のほうで、銀色に光る丸いものを見つけた。手を伸ばせばぎりぎり届きそうなところである。俺は力いっぱい手を伸ばした。それ

に手が届くと、ゆっくりと手繰り寄せた。銀色に光る丸いものは五百円玉だった。運のいいことに、最初の自動販売機でお金を手に入れることに成功した。

次に問題なのが、どうやってお金を投入するかだ。ネコの身体だと、到底投入口まで届かない。自動販売機の前行ったり来たりして、俺は頭を悩ませた。なにか土台になるものがあればいいのだが……。

そう思いあたりを見回してみる。少し離れたところに、ダンボールが山積みにされているのを見つけた。それでは駄目だ。ダンボールだと、いくらネコの身体が軽くとも、乗ったところで潰れてしまうだろう。

その隣には粗大ゴミがいくつか捨てられていた。その中に、程よい大きさのパイプ椅子が捨てられている。それなら、俺でも運べそうだ。

パイプ椅子のところまで行くと、椅子の脚をくわえゆっくり後ずさりをした。倒さないように慎重にしなければならない。普段ならさつと運べるのだが、ネコの身体だとそれはいかない。小さな身体で足と口に力をくわえ、ずるずると引っ張る。時間はかかったが、なんとか投入口の下まで運ぶことに成功した。

五百円玉をくわえ、パイプ椅子にひょいと乗ると、手を自動販売機に当てやつて立ち上がった。ちょうど投入口が正面にあった。五百円玉を投入してから、自動販売機を見上げた。買つ物はミルクティーと決めていた。目的の商品は、一番上の右端にあつた。ここから、ジャンプをすれば届きそうだ。

足に力を加え勢いよくジャンプした。ミルクティーの高さまで飛び上がった時、ひゅっと、手を伸ばしボタンを押した。ごとりとう音とともに、自動販売機から商品が落ちてきた。

さて、ここでもまたしても問題が生じてしまった。商品をどうやって取り出すかだ。パイプ椅子から降り、俺は考え込んだ。ネコなのだから人間のように器用なことはできない。

突然俺の横に大きな影が現れた。見上げると、四十代前半のおばさんだつた。手には大きな買い物袋を持っていた。どうやら、買い物帰りのようだ。

「あんた、賢いネコだね」

おばさんは感嘆の声を漏らしながら、自動販売機から商品を抜き取つた。

買い物袋から、小さなお皿を取り出すと、そこにミルクティーを注いだ。かすかだが、ミルクティーから湯気が立ち上つていた。

「ほら、飲みな

おばさんはお皿を俺のほうに差し出した。

「それにも、ほんと賢いネコだわ。誰かに教え込まれたのかしら」

再度、感嘆の声を漏らすおばさん。

人間が宿つているのだから、賢くて当たり前である。おばさんには、知るよしもないのだが、そこらのネコと一緒にされては堪らない。

俺はお皿に顔を近づけると、舌をミルクティーに当てやつた。いかにもネコらしい。しかし、それと同時に舌に激痛が走つた。

「あつつ！」

俺は叫び、思わず飛び上がつてしまつた。おばさんには、俺の行動はどう映つたのだろうか？

先ほどボタンを押したところに俺は目を向けた。そしてしまつたと思った。ミルクティーにだけ、目を向けていたためか、重要なところに気がつかなかつた。どうやら、ホットのほうのボタンを押してしまつたらしい。文字通り、ネコは猫舌ということだ。

「あら、ホットは飲めないようね。ちょっと賢いだけで、熱いものは飲めないのね。やっぱりネコだわ」

俺の行動を見てか、おばさんはくすくすと笑つた。俺はちょっとむつとした。しかしそうい返すことはできなかつた。いや、ネコだからできないのではなく、無理なのだ。

それに、ちよつとは余計だ。そこらのネコより断然賢いはずだ。いや、おばさんよりも賢いのではないか、と俺は思った。脳細胞が死滅しつつあるおばさんの頭より、大学生である俺のほうが、よっぽど知識豊富な頭ではないか。

おばさんは立ち上がり、自動販売機の前に立つた。お金の返却口から三百八十円を取り出すと、一百一十円を入れ、ミルクティーのコールドのほうのボタンを押した。残りの一百六十円は、ちゃつかりと自分の財布にしまっていた。俺のほうまでやつてくると、お皿のミルクティーを捨て、新しくコールドのまつを注いだ。

このおばさんは一部始終を見ていたようだ。

（最初から見ていたんなら手伝えよな。お釣りだけ自分のものにしやがつて）

俺は心の中で罵つた。

ともあれ、おばさんのおかげで、喉を潤すことができた。お礼の意味を込めて、

「ニヤー」

と笑顔（ネコだから、人間にはどう見られるかわからないが）でかわいらしい声で鳴くと、その場を立ち去つた。

午後も曇下がりになつてくると、雲行きが怪しくなつてきた。空は分厚い雲に覆われ、今にも雨が降り出しそうな雰囲気だ。ネコの身体に飽きつた俺は、そろそろこの身体を捨てようと思っていた。ネコの身体から離脱するため、意識を集中させた。外へ外へと、意識を追いやる。しかし、いくらやつても離脱できない。俺の意識はネコと同化したかのようで、離れる気配はなかった。それで俺は諦めた。

ちよつと不便なことはあるが、一生、自由奔放なネコでいるのも悪くはないなと思った。ネコの姿で学んだこともあるのだ。

人は時間に追われ、仕事に追われ、時として自分を見失つたりする。ストレスは溜まり、やりようのない怒りをどこかにぶつけたりする。縦社会だの、つまらない人間関係だのは、無理やり作られた虚空のなものでもない。そんな息苦しさを覚える社会には生きている。

しかしネコでいれば、そんな息苦しい生活をしなくてもいい。現実逃避になるかもしだれないが、自由奔放に、自分の思うままに行動ができる。自分を見失うこともない。縛られるものがないのだ。

俺は黒い雲を見やりながら、てくてくと歩いていた。行き着いた先は小さな空き地だつた。隅のほうに土管が一つあつた。その中で一休みしようと、そこに向かつて歩き出した。

土管に入ろうとした瞬間中から、ぎろり、と鋭く睨まれた。どうやら先行者がいたらしい。俺は数歩後ろに下がつた。中から出てきたのは、俺と同じ黒ネコだつた。

「なんだ、お前は？」

黒ネコが鋭い目を俺に向けたままいつた。ネコ同士だと言葉を交わせるらしい。

「その土管で一休みしようと思つてな」

黒ネコの目を真つ直ぐ見つめていった。

「はあ？ ふざけるな。ここは俺の場所だ」

「場所なんて関係ない。とにかく俺は休みたいんだ」

「駄目だ。ここは俺の場所だ。お前はとつとと失せろ」

黒ネコはそういう残すと、俺に背を向け土管に戻ろうとした。

「このブス黒ネコが。いいから、その場所を俺に譲れってんだ」

挑発してやつた。すると、黒ネコは足を止め、ぴくりと耳を動かし振り返つた。鋭い目を俺に向ける。怒りからか、黒ネコの顔は歪んで見えた。

「なんだと、このやう。調子に乗りやがつて」

黒ネコはキレたようだ。全身の毛を逆立て

「一ヤー」

と低く唸った。

同じよつこ、俺も全身の毛を逆立て唸つた。そしてじわじわと相手に、にじり寄つて行つた。周りから見れば、傍迷惑な一匹の黒ネコが、喧嘩しているように見えていることだらう。一匹の黒ネコの間には、一触即発の空気が流れる。

攻撃が当たるかどうか、微妙な距離になつた時、黒ネコがネコパンチを放つてきた。俺はひよいとそれを避けた。

そして俺は一気に詰め寄つて、黒ネコの顔面におもにつきりネコパンチを食らわせてやつた。黒ネコは一瞬怯んだ。それを見逃さなかつた俺は、さつと相手の背後に回り込むと、背中に飛び乗つた。その後、背中に噛み付いてやり、ネコパンチの連打を浴びせた。勝負は呆氣ないものだつた。

「くつ、クソ。俺の負けだ。ここを譲つてやるよ」

黒ネコは観念したようだ。

「へつ、弱いな」

「こつが、ボコボコにしてやる。覚えてるよ」

黒ネコはぐるりと背を向けると駆け出した。

「いつでもどーぞ。一生かかっても、俺には勝てないだろうけどね去つて行く黒ネコの背中に向かつていつた。

黒ネコを負かした俺は、土管の中に入り休むことにした。黒い空からは、ぱつりぱつりと、雨が降り出していた。雨は次第に強くなつてゆき、ついには雷まで鳴り出しきた。俺は雨が止むまで、土管の中で休むことにした。身体を丸めて目を閉じた。

田覚めた時には、すっかり雨は上がつていた。どうやら、眠つてしまつたらしい。大きな欠伸を一つすると、土管から這い出た。空には綺麗な虹が架かっていた。空き地を出ると、街のほうに向かつて歩き出した。

街は人で溢れていた。皆が皆、なにかに急かされるようこそ、すたすと足早に歩いている。何人の人が俺の横を通り過ぎて行く。

俺は場違いなところに来てしまったような、孤独感を覚えた。誰もが俺の存在には気づいていないようで、都会という街の存在が、ネコの存在を消し去るかのようだ。ネコは下町がお似合いなのだろうか。

電気屋の前まで来ると、俺は足を止めた。俺の目は、商品であるテレビのニコースに釘付けになっていた。ニコースは列車の事故を取り上げていた。

そのニコースによると、今朝、大同川に架かる鉄橋へ電車がかかった時、鉄橋が崩れたというものだった。鉄橋は老朽化していたらしく、電車の重みに耐えられず崩れてしまったということだ。電車は全部で四両。四両全てが川に落ち、一人が意識不明の重体で、他の者は全員死亡とのことだ。意識不明の一人とは俺のことだろ？。しかし俺は死んだも同然だ。ネコの身体から抜け出し、幽体が俺の身体に戻らない限り、生き返ることはない。

幸か不幸か、なんとも複雑な心境だ。たまたま、俺が乗った電車が被害に遭ってしまった。そして意識不明とはいえ、生き残つてしまつたのは俺だけだ。そんなことを思つてしまつと、他の亡くなつた人に対して、申し訳ないという気持ちが込み上げてきた。

テレビから視線を外すと、とぼとぼと歩き出した。心なしか、足取りが重いような気がした。しばらく、ぼうつと歩き続けていた。前を歩く、スーツを着たサラリーマンらしき人が、ぽいとなにかを投げ捨てた。それは煙草だった。まだ火がついていた。

マナーの悪いやつだなと思いながら、俺は火を消そうと煙草を踏みつけた。同時に足の裏から熱を感じた。

「あつ！」

俺はネコであることをうつかり忘れ、つい癖で煙草を踏みつけてしまった。かわいらしいネコの肉球は、小さな火傷を負つてしまつた。煙草を捨てたサラリーマンらしき人の背中を鋭い目で睨みつけた。

「あのやろ、許さねえ。恥さらしにしてやるぜ。ずれてんだよ、バ

「一力」

俺はオヤジの背中に向かっていった。無論、オヤジは気づかない。自分の不注意だから、ハツ当たりのようだと思えるが、この際そんなことは関係ない。オヤジは頭を上手に具合にカツラで隠しているようだが、第三者から見ればすぐにわかつてしまう。

（思い知らせてやるうじやないか）

魔が差したようで、俺はよからぬことをふと考へた。全く、ネコの姿を借りていれば怖いものなしでいられるというものだ。

俺はオヤジに向かつて勢いよく駆け出した。素早くオヤジの股下に潜り込むと、そこでおもいつきリジャンプした。頭突きが、見事にオヤジの股間にヒットした。オヤジは悶え苦しみながら座り込んだ。すかさず、頭の上に被さっているものを剥ぎ取つてやつた。オヤジの頭は見事なバーコード禿だつた。少し距離をとつてから、禿オヤジのほうを見やつた。カツラはその辺に捨ててやつた。

「あのネコすげーな」

「ふふふ、面白いネコね」

「あいつすげーいぞ。そちらのネコよりおもしれえー」

俺を見ていたらしい連中が、口々にいった。俺はなんだかい気になってきた。

「くそネコが」

禿オヤジは顔を真つ赤にして、俺を睨みつけた。

「ニヤー。ニヤー」

俺は嫌味つたらしく、挑発するように喉を鳴らした。

禿オヤジは顔を赤くしたまま、俺に歩み寄つてきた。しかし、俺は逃げないでいた。こいつを、もつとからかつてやるうと思つたのだ。

禿オヤジは俺に向かつて蹴りを放つた。俊敏な動きで、ひらりとそれを避けると、素早く背後に回りこみ禿オヤジの尻に体当たりをしてやつた。禿オヤジはふらついた。その瞬間、周りかどつと笑いが沸き起つた。

もう一度距離をとり、俺は戯けるようにして飛び跳ねた。

「このやうー。馬鹿にしやがって」

禿オヤジの顔はますます赤くなっていた。ネコに虚偽にされるのは、どれほどの屈辱なのだろうか。

再び禿オヤジはすかずかと近づいてきた。その時、ふと別のものが俺の目に飛び込んできた。

横断歩道を一人の子供が、楽しそうにお喋りをしながら渡っている。ランドセルには交通安全の黄色いカバー。おそらく、小学一年生だろう。さらに奥からは、トラックが猛スピードで向かってきていた。赤信号だというのに、スピードの落ちる気配が全くなかった。運転手は気づいていないのかもしない。

「余所見してんじゃねーよ、このくそネコが」

油断していた俺は、禿オヤジの重い一撃を食らってしまった。腹に激痛が走った。少し吹っ飛ばされたが、痛みを堪え態勢を整えると、勢いよく駆け出した。禿オヤジの横をさつと抜けていく。

「逃げんな、くそネコ」

禿オヤジが俺に向かって叫んだ。それを無視して、一人のほうに向かって走った。間に合つだらうか。トラックはたちまちに一人に迫ってきていた。

一人とも助けることはできない。どちらか、一人を選ばなければならぬ。どつちを選ぶ。俺が走りながら考えていると、隣に黒い影が現れた。それはあの時の、黒ネコだった。

「今は構つてやることはできない。後にしろよ」

俺は走りながらついた。

「わかつてゐよ。お前だけかつこつけて、死ぬなつてんだ。お前が死んだら、俺のリベンジができなくなるだろ」

「お前死ぬつもりか」

「お前だつて同じだろ。子供たちを助けるために死ぬんだろ」

「そうだ」

俺と黒ネコは一人のほうに向かって走り続けた。間に合つか……。

トラックは一人の目と鼻の先にまで迫っていた。スピードは一向に衰えていなかつた。俺はトックラの運転手を見やつた。運転手はうとうとしている。

俺はさら^ハ加速し、小さな身体で男の子のランドセルに向かつて体当たりした。黒ネコも同じように、隣の女の子のランドセルに向かつて体当たりした。

間一髪、二人は車道から外れ、歩道に倒れた。しかし俺たちの逃げる時間はなかつた。強い衝撃を受け、俺は宙を舞つていた。目が回り、世界がぐるぐる回る。

まさか、一日で二回も不幸なことに遭遇してしまつとな……。その後、俺はどうなつてしまふのだろうか。俺の意識はふつと途切れ、全てが真つ暗になつてしまつた。

『……』からか、ぼんやりと俺の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。その声は聞き覚えのある声だった。俺の意識は暗闇の中だ。

「うわわわ」

今度は、はつきりと聞こえた。俺はゆっくりと田を開けた。視界がぼやけて見えたが、徐々にはつきりとしたものに変わつてゆく。そこには俺の知つている顔がずらりと並んでいた。泣き顔の母に姉、心配そうに俺を見つめる父や大学の友達。皆一様に俺を見下ろしていた。

「亮輔……田を覚ましたのね」

「 姉はやつこいつと泣き出した。それに釣られてか、母も泣き出した。

「からか木」の轟き声が聞こえた。近ごろで、遠ごろなかで

皆の後ろに、黒ネコがいた。黒ネコは笑顔で俺を見つめていた。

その黒ネコは、俺が身体を借りていたネコだ。どうやら他の者には、
ネコの姿は見えず、鳴き声も聞こえなかつたらしい。

（ごめんな。俺のせいで、お前を死なせてしまつて。本当にごめん）

俺は黒ネコを見つめながら、胸の中で何度も謝つた。

黒ネコは再度鳴くと、俺に背を向け窓に向かつて歩き出した。窓
を突き抜け外へ出ると、ふわふわと漂いながら、茜色に染まる空へ
とけこむかのように消えていった。

そうさ、ネコは何ものにもとらわれず、勝手気ままにいけばいい。
死んだつてネコは猫だ。きっと、あの黒ネコはこの先もずっと、自
由に世界を旅するのだろう。

俺は重い頭を起こすと、夕空に目を向けた。

「俺も、いつかネコみたいに生きてみたいものだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3679c/>

ネコな一日

2010年10月8日15時20分発行